日　　時	令和３年３月１６日（火）１７：００～１９：００
場　　所	三重県立飯南高等学校会議室
出 席 者 (敬称略)	土方　清裕（三重県立飯南高校校長）、　中村　誠（三重県立飯南高等学校ＰＴＡ会長）、 野呂　隆生（松阪市地域振興担当理事）、　髙木　達彦（飯高地域振興局長） 中林　穣太（西部教育事務所長）、　中野　孝是（粥見住民協議会会長代理） 中村　元亮(松阪市立飯南中学校校長)、　森井　義和(松阪市立飯高中学校校長)、 山際　健太郎（東部中学校教諭）、　高橋　克良(同窓会長・応援団長)、 一尾　哲也（三重県教育委員会事務局教育政策課）、飯南高校教職員５名
議　　事	（1）「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」について （2）コミュニティ・スクールについて （3）令和２年度飯南高等学校活性化プランの進捗状況、及び成果と課題について （4）保護者の転住を伴わない県外からの入学志願制度について （5）その他
議事概要	**（1）「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」について** ・資料を中心とした取組報告のあと協議。 ・コロナ禍であっても活動の形ができた。いいなんゼミ発表会での内容も充実していた。行政職員としても、高校生と関わる機会が自然な形で継続できた。ぜひこれからも継続して関わっていきたい。 ・ゼミについては各担当の教員が、以前に比べて外部にアドバイスをもらう雰囲気が出てきた。例えば高田短大の講師や岡三証券の方など。教員としても勉強することが多い。生徒はとても大きな化学反応をしてくれた。 ・次年度はもっと早い段階で本気の大人と伴走していきたい。そうすることで、今年度以上に生徒を伸ばせられるのではないかと思っている。オンラインを使った発表会については、外部の専門家の力も入ったことでとてもすごいものになった。リスクを避けるという意味であのような形で実施することになったが、担当教員も生徒もとても頑張ったと思う。新しい形が示せたのではないかと思う。 ・市と県立高校は関わりにくいと思っていたが、昨年度土方校長と国へヒアリングに行った際に、総合計画に乗せるくらいの意気込みがほしいと言われた。今年度総合計画の改訂の年だったが、そこで飯南高校の魅力化に関する文言を入れることとなった。地域を担っていく子どもを育てるために、市としても協力していきたい思い。総合計画にこの一文を載せられたのは、これまでの生徒や教員の頑張りもある。こちらとしても関係しやすい状況になった。コミュニティ・スクールになる中でも関わって行きたいと思っている。 **（2）コミュニティ・スクールについて** ・前任校長の頃から協議があり、継続して取り組んだ。３月 11 日の教育委員会定例会の議案として取り上げられて承認されたため、本校は令和３年４月１日からコミュニティ・スクールとして動くこととなる。「高校と地域をつなぐ人材の在り方研究会」のペーパーを見ると、高校を様々な関係団体が取り囲んで、高校を核とした地域創生と社会に開かれた教育課程の実現を目指している。ただ、この形はすでに本校で実現していることであると感じた。活性化協議会＝学校運営協議会でいけば、今の形でいけると考えていた。国の事業なので、今後も半永久的に動いていけると思っている。学校運営協議会の委員は上限 15 人だが、PTA や下宿運営連絡会の委員、保護者からの立場からも意見をいただく形でメンバーを組んだ。来年度については、内容は重なるが同日に活性化協議会と学校運営協議会を続けて行う形になると思う。地域との連携がかなり前に進んだと思う。 ・どういう形で活性化に向けてお手伝いできるか考えている。松阪市の地域おこし協力隊が２名になり、その活動として地域に出向いているが、そこで地域の方の協力はあるか。 ・今年度のフィールドワークでは、２回目に地域を深掘りすることとなった。昨年度は事前に地域の方に連絡をして出向いていたが、今年度は生徒の主体性を伸ばすことを考えて、生徒が自ら地域の方にお願いして協力いただいた。どの地域でも生徒は楽しんで活動していた。 ・地域の方がどのようなことに強みがあるのかといった名簿はあるのか。

・そこまではないが、個人的にまとめたものはある。
・飯南中学校区のコミュニティ・スクールの協議会では、地域の方の名簿を作ろうという意見があがっている。６月頃に登録を呼びかけて名簿を作るので、４月以降で一緒になっていくときに連携をしていければと思っている。
・地域にどのような方がいるのか蓄積をして、手分けして挨拶もしていければいい。
・連携ができるとより活動の幅が広がっていくと思うので、ぜひお願いしたい。粥見住民協議会としては、昨年度並みの予算を積んでいきたい。

（３）令和２年度飯南高等学校活性化プランの進捗状況、及び成果と課題について

・系列で学んだことを発展させるというゼミ内容が出てきたことや、学校外の方に協力してもらうという芽が少しずつ出てきたことは大きな成果だと思っている。今後はゼミテーマ設定の指導の仕方や、２年次キャリアデザインの学びをどう活かしていくのかが課題。いいなんゼミ発表会を遠距離の方に見ていただいたのは有益だった。ただし来年度以降どのようにしていくのかは予算の面でも課題。さすがに教員だけでできるものではないと感じている。キャリア・パスポートをどのように活用していくのかという点は、これまでの連携中のものと比較もしながら、活用法を引き続き議論していきたい。今年度は介護施設に関するいいなんゼミ活動をした生徒が、三重短期大学に推薦合格を果たした。系列での学びを繋げて探究活動を地道にやっていけば、しっかり進学に繋がっていくことが証明された。ゼミでの探究活動が大学進学へも繋がっていくと感じている。コロナ禍で分かったことは、本当の信頼関係、気持ちが繋がっている関係をこれまで作れていたのかが問われていること。地域との協働活動はまさにその賜物だと感じている。ただ、そうは言ってもできないことはあるので、次年度どこまでできるのか模索をする必要がある。小中高で有機的なＰＲができると、地域として効果的なのではないかと感じている。
・フィールドワークは地域の活性化に繋がると考えている。スクールバス等のできるところからの協力はしたいと思うので、早いうちの連絡・調整をお願いしたい。
・定員割れが３年続くと、学級減というルールは生きているのか。
・活性化協議会そのものは５年間だが、２学級規模の維持ができていれば。全体の生徒数が減ってきて志願者数に現れているが、今後も活性化に取り組んでいってもらえればと思っている。
・正直今後どうなるか分からないが、今年度入試から、クラス単位で減らさないが人数を減らす（１クラス 35 人）という形が出てきている。この場合は教員が減ることになるので、教員数が少なくなると３クラス展開が難しくなるし、開講できない科目が出てくる。そうなってくると、手厚い教育ができなくなるなどの影響が出ることになる。

（４）保護者の転住を伴わない県外からの入学志願制度について

・下宿先が２か所あるため、前期２名以内の募集をしている。県からは、前期・後期で分けた方が良いのではないかという助言はあるし、後期に県外枠を残しておくのは一理ある。ただ、多数募集があった場合に苦しい選択をする必要が出てくる。選んでもらえる学校にしていきたいと思っている。まだ誰も県外生が来ていないところで下宿先を広げていくのは難しいと感じているが、確保していくことは大きな課題だと感じている。少子化が進行しているので、地域の方にもご理解いただければと思う。今いる生徒にも、地域にも大きな影響があると思う。
・年々取り組みを行っている成果は少しずつでも出ていると感じているし感謝している。地域みらい留学で生徒が今年度集まらなかったのは残念だった。教育関係者には評判が良いものの、中学生には響いていない原因は何なのか。
・オンラインになったことで、県外の小規模校も苦戦していると聞いている。美しい自然や珍しい部活動があるといった部分で生徒が集まっているらしい。このことについてはプラットフォームの方々も危機感を持っていて、推したい学校がうまくいっていないようだ。大きな反省は、下宿先の方にもっと前面に出ていただいて、ここだったら留学したいと思える形にしていかなければと感じている。
・かつての寮を耐震性にしてできないか。
・舎監をたてるなど大変な部分がある。決して県から潤沢に予算があるわけではない。寮は学校や県が運営すると管理の問題で苦慮する。多くの学校では町が運営していたりする。10 年ほど前から全国募集をしている隠岐島前高校は、地域の自宅へホームステイする形をとっている。とりあえず、１名来てもらえれば様子は変わると思うが。
・今年度はコロナ禍で学校行事の日程変更があり、高校入門講座に生徒を送ることができなかった。とても魅力的な教育活動をしているので、市内からも飯南高校へ生徒を送っていきたい。飯南のイ

	メージとして遊ぶところがないという生徒はいるが、それより家からの距離の問題を感じてしまっている。また、寮に入りたいと思っている生徒もいる。もし下宿させてもらえるチャンスがあれば、もしかすると入学を志望する生徒も出てくるのではと思っている。 ・こんなにすごい学校はなかなかないと思っているが、まだまだ生徒や保護者に取り組みを分かってもらえていないところがある。今後何とか考えていきたいと思っている。 ・コロナ禍によって、これまでできていた中高の交流が失われてしまっているのが寂しい。コミュニティ・スクールを作ることで、飯南・飯高地域が１つになるのではと思っている。小学生の連携、中学生の連携と発展していけることが楽しみである。